



『新規就農7年目の冬を迎えて』

酪農経営：荒川町大字貝附 斉藤 和之氏

平成8年に鯉湖学園を卒業して就農し、今、7年が経過しようとしておりますが、その間、口蹄疫、BSE騒動を始め、家庭内でも様々な出来事が続き、慌しく過ぎた日々でありました。

卒業後2年間は地域の酪農組合のサブヘルパーとしてお世話になり、学生時代には体験できなかった、実際の酪農現場での「飼養管理方法の多様さ」に触れ、さらに「牛の基本的な見方」を学ぶことができたのは自分にとって貴重な経験であったと思います。平成10年に父、母と共に我が家の酪農経営に参画しましたが、その年の10月10日には、翌年の披露宴を待たずに入籍し、現在、間もなく3歳になる長女と今年誕生した長男の2人の子供に恵まれ忙しい毎日を送っています。

平成11年には、口蹄疫の発生を契機として、農協から肉用牛肥育農家が給与するための「国産稲わら」を収集出来ないかとの相談があり、稲作農家を含めた3戸の構成員による「荒川町稲わら部会」を設立し、平成12年は7ha、平成13年は15haの収集を行いました。平成14年には40haを計画したことから、補助事業を活用してトラクター、ロールベア等の作業機を導入し、稲わらを収集した水田には堆肥を散布して返すという方式で作業を進めています。また、本年は大豆生産組合で連作障害を回避するために稲ホールクroppサイレージの生産について検討がなされ、48aと限られた面積ではありますが試験的に栽培を行いました。

今後、我が家の酪農経営を発展させて行くには、牛舎の新築、環境問題への適切な対応と共に、安定的な自給粗飼料生産が不可欠であると考えられるので、8ha程度の現有草地の有効活用や地域の耕種組織との連携を強化し、地域資源の積極的な利用をさらに推進して行く必要があると感じています。



～牛と苦楽を共に した牛飼い人生～

肉用牛経営：

松之山町浦田 村山 重雄氏

今年近年になく初雪が早く、冬の到来に戸惑っている有様であります。我が家の肉用牛経営は、昭和49年に共同牛舎が出来て最初は父が肥育経営をしていましたが、少しずつ繁殖牛を増頭して繁殖経営に重点を移してきました。私は繁殖牛、父は肥育牛を管理してきました。昭和56年に新たに20頭規模の牛舎を建て、共同牛舎から新しい牛舎に移転して規模拡大を図りました。与える粗飼料は以前造成した草地と転作田を造成した草地で、仲間と二人で共同で導入した機械を使い収穫してサイレージや乾燥を作り完全自給を図っていました。しかし、繁殖牛を新しい牛舎で飼養2年目頃から生まれてくる子牛が生後1ヵ月くらいの間に突然死する日々が3年位続きました。このことで、以前は母牛のお産が近づくと楽しみのはずが、この時期はいたたまれない気持ちが続き大変苦しい時でした。

病原菌の特定には、掛かり付けの獣医さんや家畜保健衛生所の先生方には大変なご苦労を懸けました。残念ながら特定はできませんでしたが次第に発病が少なくなり終息に向かいました。こうしている間に子牛価格が暴落したり、O157の発生騒動もあり繁殖経営には決して良い条件とは言えず経営の建て直しも必要になりました。農業従事者が私一人だったこともあって労力配分面からも、繁殖牛の頭数を減らし借地や請負耕作により水田面積を拡大して経営改善に取り組んだ矢先に、口蹄疫の発生に続き我が国に発生しないと言われたBSEが発生、加えて大手食肉加工業者による牛肉偽装事件が続げざまに起きて一生懸命生産に励んでいる肉用牛農家を脅かす昨今であります。このような時代の流れの中で、私のような小規模肉用牛農家はどのような経営展開をすべきか思案しているところですが、まずは、景気回復を祈りながら、この地の豊かな自然環境と調和した、和牛繁殖と米作りを基盤とした農業経営を発展させて行こうと思っております。